
エセプリカ

光太郎

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

エセプリカ

【Nコード】

N1482C

【作者名】

光太郎

【あらすじ】

不思議な少女の、とても短い物語。

ダーク系ショートショー

ト 【2007年執筆】

エセプリカ

「懐かしい歌を歌っているのね」
声をかけられ、少女は振り返った。

の目の エセプリカ

金色

たの 瞳は 金色で

あな

きらきら 光ってる

きらきら

の目の エセプリカ

金色

わいい エセプリカ

かわい
か

あなたを 愛すでしょう

だれもが
あ

の目の エセプリカ

金色

きれいで いたいから

ずっと

べても いいですか

あなたを
食

長いブロンドに、茶色の瞳。エプロンドレスを着た、人形のような少女。

声をかけた主は、少女の容貌に目を見張った。

「驚いた……。天使かと思ったわ、お嬢ちゃん。でなければ……。そう、まるで歌のなかから、エセプリカが出てきたのかと」

「ここ、取り壊しちゃうの？」

少女は、まったく別のことを口にした。

女は寂しそうに微笑んで、首からぶら下げた十字架にそっと触れる。

「そうね。お嬢ちゃんが天使だったとしても……。もう、遅かったわ。この教会は、なくなってしまうの」

「かみさまが住んでいるのに？」

「もうどこかへ行ってしまったのよ」

少女は、女の胸元の十字架を、それから正面に堂々と掲げられた大きな十字架を、見た。

ここに在る事実は変わらないけれども、もうここには、いない。所詮はひとの心のなかのものだから。

「へんなの」

責められるようにまっすぐ見られ、女は、少女の大きな瞳から、少しだけ目線をはずした。

「仕方ないわ。一年前に大きな結婚式があっただけど……。その二人が、不幸な結果になってしまったの。それから、だれもここへは訪れない」

「へんなの」

もう一度繰り返し、それから少女は、かすかに唇で笑顔の形を作った。

「でもそれは、あたしには関係ない」

少女は跳ぶように立ち上がり、ふわりとスカートを翻した。

上目遣いに、女の顔をのぞき込む。

「ねえ、お姉さん。あたし、お腹が空いてるの。ごはんを食べさせ

て

女はゆっくりと目を瞬かせ、それから思わず吹き出した。

「とんでもない天使ね！ いいわ、何か作ってあげる。いらっしやい」

女はそつと右手をさしのべた。少女はその手をつかみ、満面の笑みを浮かべる。

「ありがとう、お姉さん」

教会の裏側には、質素な造りの民家が建っていた。民家というより、小屋に近い。一日、二日宿をとるのに使われる類の、最低限の設備しかないようだった。

「お姉さんは、シスターさんなの？」

女はエプロンをつけながら、小さく笑った。

「違うわ」

「ここに住んでいるの？」

「いまはね」

言葉少なに返し、キッチンに立つ。少女は許可も得ず、木の椅子に腰かけ、テーブルに頬杖をついた。足をぶらぶらさせながら、家のなかを見渡す。

風の冷たくなる季節だというのに、窓という窓がすべて開け放たれている。床には絨毯、その上にテーブルが一つと、椅子が二つ。辛うじてタンスはあるが、暮らしているにしては、生活感がない。第一、どこで寝ているというのだろうか。

ぺたりと頬をテーブルにつけ、少女は料理をする女を見た。

黒いワンピースの、痩せた女。

「ねえ、エセプリカって、知ってる？」

こちらを振り返らずに、女は答えた。

「知ってるわ。さっきあなたが歌ってた、金色の目のエセプリカ」
肉と野菜を炒めたものを皿に盛り、テーブルへと運ぶ。
ことり、と皿を置き、スプーンを少女に渡した。

「小さいころ私も歌ったし、おとぎ話も聞かされたわ。エセプリカの肉を食べると、いつまでも若く綺麗でいられる、ってお話」

「おとぎ話なの？」

「おとぎ話よ。昔は何も思わなかったけど、いま思うと残酷な話よね。食べる、だなんて」

「これも、お肉」

少女は、スプーンでこんがり焼けた肉をすくった。いただきます、とつぶやき、口へ運ぶ。

「ざんこく？」

困ったように、女は笑っただけだった。

「お姉さんは、食べないの？」

皿は一つだけだ。女は少女の向かい側に腰かけて、こちらを見ている。

「お腹空いてないの？」

「食べたくないの」

やわらかく、しかし強い意志で答える。

少女は、小首をかしげた。

「死んじゃうよ？」

ひどく痩せた身体。

目の下には、はつきりと隈が刻まれている。

「いいのよ」

「帰ってこないから？」

女は、かすかに、目を見開いた。

無邪気に問いかけてくる少女の目を見た。

聞き間違いだろうか。

「……なに？」

「あいするひとが、帰ってこないから？」

少女はスプーンを置き、跳ぶように立ち上がると、絨毯をめくった。その下にあった、地下へ続く扉を見て、わざとらしく鼻をつまむ。

「ねえ、これ、もう腐ってるよ」
女は動けない。

「一年前に結婚した年下のカレは、すぐにもっと若い女の人と、出て行っちゃったんだよね？ かわいそう。でも殺しちゃうことないのに。神父さんも、シスターも、若い女の人も」

少女は、女の隣へ回り込み、その左手にそつと触れた。愛おしうに、もうぶかぶかになってしまった薬指のリングに、口づけする。
「お姉さんの、あいするひとも」

女は少女の手を振り払い、少女は床へたたきつけられた。

震えながら、少女を見下ろす。茶色の瞳を細め、少女は笑った。
「どうして驚いているの？ お姉さんが呼んだから、来たのに」

女の表情から、徐々に、驚愕の色がなくなっていく。やがてその唇が、笑みの形に、ぐにやりと曲がった。

「お嬢ちゃん、あなたの、名前は？」

「エセプリカ」

ああ、と歓喜の声を上げ、彼女は少女を抱き上げた。我が子を抱くように、ほおずりをして、愛しさに瞳を伏せる。

「待ってたわ、エセプリカ！ あなたがいれば、彼が帰ってくる！ 私は誰よりも綺麗になって、彼の愛を一身に受けることができるんだわ！」

女は少女を抱いたままキッチンへ行き、包丁を手に取った。

「さあ、あなたを食べさせて　　！」
少女は笑った。

瞳の茶の色は、ゆっくりと金に染まった。

金色の目。

「いったでしょう、ごはんを食べさせてって」
鮮血が散った。

エセプリカ

の目の エセプリカ

金色

きれいで いたいから

ずっと

べても いいですか

あなたを 食

少女は歌いながら、木の椅子に腰をかけ、足をぶらぶらと揺らす。
横たわる食料を見下ろした。

「ありがとう、お姉さん」

(後書き)

読んでいただき、ありがとうございました。

エセプリカ

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1482c/>

エセプリカ

2009年3月24日09時20分発行